

私の幼少年時代の満州での思い出

嘉穂郡稲築町 浦上 博

私は日本で生まれ、幼年時代福岡県嘉穂郡小竹町目尾古川鉱業所炭住で生活しておりました。昭和14か15年頃父の仕事の関係上、旧満州トオマン ソオシヨーケイネエ県満道密山炭坑に家族全員で満州（現在、中国東北地方）に渡りました。

父浦上泉、母浦上千代之、私浦上博、兄奥園和昭、長女浦上冴子の一家5人です。兄は父母が長男、長女のため母方の氏名を名乗っていたのです。私が満州に行って1年後ぐらいして在満州国民小学校に入学いたしました。それはそれは一口に言葉では言い表すことのできない大陸の大自然を相手に楽しい毎日を送っていました。また妹満澄が生れ、弟幸男が生れ、家族の方も大家族と成り、一家大変幸せでした。ところが生涯忘れ去ることのできない不幸に見舞われたのであります。私が小学校6年の夏休みで楽しいはずの7月25、6日夜中に、日本軍不利と見たソ連が旧満州に対し、日露戦争により向う40年間両国は不可侵条約を結びながらも、卑怯にもソ連満州国境を越え、また空軍による爆撃を行ったのであります。

そのため私達の住んでいる所も一晩中爆撃を受けました。朝7時、ここも危いので一時避難という形で、すぐ戻るということで石炭を積む貨車に乗せられ、牡丹江まで避難することになりました。途中ソ連空軍に依る機銃掃射を受けて、何人もの尊い命が奪われました。

やがて何時間もかけて牡丹江に着きましたが、牡丹江もやはりてんやわんやでございます。私の一団はすぐに中学校の校舎に避難しましたが、ここでも一晩中空襲をうけ防空壕から出る事もできませんでした。やがて朝が来て牡丹江も危いということで、旧新京、現在の長春まで逃ることになり、成人男子全員銃を取り、軍人としてソ連満州国境近くへソ連軍を迎え打つためにと旅立って行きました。私達一家5人は新京へと逃れました。その頃兄は無順工業学校に入学しておりまして、離ればなれになりました。私達一家は戦時中のことであり、集団で避難し集団生活をいたしました。やがてあの8月15日を迎え、その後は団結も「どとう」のごとくくずれ去って行きました。

みんな自分が生きていく、また家族が生きていく事、また外地での難民生活の難しさを身をもって知ることができました。満州の季節の変るのは早いもので、早くも冬がおとずれ、難民は飢えと極寒も耐え抜かねばなりません。

やがて栄養失調と寒さで毎日数十人や数百人もの死者が続出したので、その中で自分の子供を中国人にあずける人が続出したのでございます。私は中国の「あたたかい心」の持主これぞ中国大陸の誇るところと、私は一生忘れる事はありません。やがて年もあけて1月、私達は新京の奥地戦時中青年隊が開拓団として入植しておりました、旧名ひがしだいとおぼおしん、と言う所に移り住みました。1日2回食べ物と言えば、三等コーリヤンを兵隊さんの鉄カブトをナベ替りにして、小説の本、雑誌等を何枚かまとめて破り、かたくひねって薪替りにしてコ

ーリヤンをたいて食べました。

3月始め冴子・母千代之が栄養失調により入院することになりましたが、避難所での入院、薬等あろうはずありません。死を待つほかないのです。新京の4月と言えば、まだまだ氷が張りつめています。そんな中4月1日冴子死、続いて4月5日母千代之死。こんな時なので涙することもありませんでした。その後仮の施設のような所に引き取られました。私が現在の中学1年です。施設に入ってから満澄5、6才で、朝から晩まで一言もしゃべろうとはしなくなり、一日中でも右を向けと言えば右を向き、左を向けと言えば左を向き、何一言しゃべろうとはしませんでした。弟の幸男は母を無くし三日三晩泣きつづけ、私も本当に困ったものでしたが、幼心に頼りにする者はこの私だと幼心に気がついたのか、その後は私の言う事をよく聞いてくれ、私も本当にかわいくてたまりませんでした。そんな三人の思いがかなったのか、母の天からの心が通じたのか、7月に引揚げ命令が下りました。

やがて日本に帰れる大人の人達は大喜びですが、私にはあまり喜ばしい事ではありませんでした。幼年時代満州に渡り日本を知らないのです。戦時中の事でもあり、本籍地だけ頭の中にたたきこんでいたのです。2週間ほどあちらこちらと引き回されて、コロ島と言う所に来ました。後にわかりましたが、日本からの迎いの船の数が制限されていたせいだと思います。

やっと乗船、佐世保の外海に停泊、やがて上陸と言う時に病人が出ました。やがて全員検便、何人もの人が「チブス」にかかり、上陸が1カ月船の中で足止めになりました。その間に幸男も栄養失調となり8月5日死亡。やがて満澄と二人上陸、元軍兵舎ハイノサキ（現在陸上自衛隊）で古里へ帰る手続きをしました。本籍地を頼りに「キップ」を手に入れました。

今でも忘れることの出来ない事は、高等科1年の夏に初めて足をふみ入れた日本です。私はどこへどう行ってよいのかわかりません。

ただ全員引揚げ列車という強い心の支えがありました。やがて汽車は走りだし、「有田、有田」と駅員さんの呼ぶ声、次は「博多、博多」、私が頭の中に覚えて今でも忘れられません。

「神宮、神宮」、「福岡、福岡」と駅員さんが呼んでいます、私には何の事やらわからず、そのまま大人の人達と一緒に乗っていました。ところが前の人が「あなたたちどこに行くの」と聞かれ、「福岡県嘉穂郡二瀬町伊岐須3番地」と言うと、「では次の駅折尾で下りなさい」と言われました。これから二瀬に着くまでの苦労話はまだまだ大変、文面には書き表せないくらい、苦労話がありますが、自分の苦労話を連綿と書いても仕方のない事でございます。

今は二人の男の子も妻をもらい二人づつ、わたしには四人の孫がいます。今は幸せ、妻も私の昔をよく理解してくれて幸せです。

ただ心から1日も放れないのは1日も早く長春に母と妹との「魂」「霊」を迎えに妻と二人で行きたいと思いますが、この世思うようにはなかなかありません。それが残念です。